

# 標示の諸相——動詞 mark の意味構造について

友 澤 宏 隆

## 1. 序説

言語において音韻や文法とともにその内部構造の主要な構成部分である語彙の問題は、言語研究における一大課題であることは多言を要しない。言語の語彙はすべて各々独自の用法を有しており、その実態を解明し適切に記述することが従来の語法研究の大きな目的であったと言えよう<sup>(1)</sup>。現実のデータの観察に基づく個別的事実の発見・記録を核とした語彙の記述的研究は膨大な蓄積があるが、それらから現代の言語研究への有意義な貢献を生み出すためには、発掘された諸事実の関連性とそれらを貫徹する規則性の探究および種々の理論的な観点との関係づけによる一般的・体系的視点の導入が不可欠である。近年ではそうした認識に基づいて、特に認知意味論・認知言語学に立脚した実質的な語彙研究の成果が顕著になりつつある<sup>(2)</sup>。

本論考では、語彙の記述的研究の一事例として、英語の動詞 mark をとりあげその語義の分析を行なうとともに、Langacker の認知文法におけるカテゴリー記述モデルを用いてその意味構造を一般的な観点から捉えることを試みる。mark という動詞は、get や take などのいわゆる基本動詞が示すような多義性は欠くものの、その語義の拡がりは多様であり、現代英語において多用される動詞の一つと言ってよい。日常的な文脈における用例に加えて、言語学関係の議論においても“tense marker/mood marker (時制の標識/法の標識)”などの用語の中にその派生的な用例が見られ、われわれにとってなじみのあるものとなっている。本論考では、まず動詞 mark の語義の展開を概観し、さらに各々の語義に関係する意味要素を仮定しその観点から各語義を詳細に検討した上で、Langacker の認知文法で提唱されているカテゴリーのネットワーク・モデルの枠組の中にその多義構造——「標示の諸相」とでも呼ぶべきもの——が適切に位置づけられることを示す。各々が独自の拡がりを持つ言語の語彙の記述的・理論的研究に小さな光を照射することが本論の目的である。

## 2. 動詞 mark の語義

### 2.1 mark の語義展開

まず mark という語の語義の展開の概略について把握しておくことにする。瀬戸(編)(2007)によると、mark という語は本来「(後に残る) 痕跡」を中心的語義とする名詞であり、そこからメトニミー(換喩)を介して「(物に) 痕跡をつける」というプロセスを表す動詞用法に対応する語義が派生し、また「痕跡」からメタファー(隠喩)を介して(意図的な)「(何かを示す) 印(しるし)」という名詞語義に拡張し、そこから再びメトニミーによって「(物に) 印をつける」「(印が) ……を印で表す」というプロセスを表す動詞語義に展開するとされる(同書:585)。このように動詞 mark の基本的な語義の展開は、名詞 mark の語義の拡張に平行して行なわれるものである。

### 2.2 動詞 mark の語義分析

以下では、上で示した概略的な語義展開を前提として、動詞 mark の各語義について詳細に検討を進めていくことにする。

#### 2.2.1 語義その1——「痕跡の付加」

上述のように、mark という語はその中心義である「痕跡」に対応するプロセスを表す語義で用いられる。それは次のような場合である<sup>(3)</sup>：

- (1) We were careful not to mark the paintwork. (LDCE<sup>3</sup>)
- (2) The cat marked the carpet in the front hall. (瀬戸(編)2007)
- (3) The boy's wet shoes marked the floor. (グロ<sup>2</sup>)
- (4) The disease had marked her face for life. (LDCE<sup>3</sup>)
- (5) Be careful not to mark the glass with your fingerprints. (瀬戸(編)2007)
- (6) His chest and arms were marked with scratches and scars. (瀬戸(編)2007)

これらにおいて、mark は「ある対象物に(ある行為や出来事の結果生じた)痕跡をつける」の意味を表す。この場合注意すべきことは、「対象物」に「痕跡」という(以前は存在しなかった)「付加物」が与えられることによって、「対象物」はある「意味づけ」を被るという点である。たとえば(2)の場合だと“the carpet in the front hall”

という「対象物」はただのカーペットではなく「猫がその上で爪を研ぐなどの行為を行ない、その結果傷んでしまった（元の状態とは違う状態になってしまった）カーペット」という「意味づけ」を持つ。(3)の場合だと「対象物」は「そこを（うっかり）ぬれた靴で踏んでしまい、その結果ぬれた靴跡のついてしまった（表面の状況が変化してしまった）床」という「意味づけ」を持ったものということになる。「(「痕跡」という)付加物」「対象物」「(対象物についての)意味づけ」という三つの意味的要素と文の要素との対応関係について考えると、「付加物」は文中に明示されていないか((1)(2)), 文の主語により(示唆的に)示されているか((3)(4)), withの前置詞句によって示されている((5)(6))。「対象物」は動詞の目的語によって示されているか((1)–(5)), 受動文の主語によって示されている((6))。「意味づけ」は文中には明示されていない。このようにこれら三つの意味的要素は文要素としていつも等しく具現されるわけではないが、動詞 mark の語義に関係する項としてこれら三つの要素を仮定することは妥当であると考えられる。ここで「付加物」を M, 「対象物」を X, 「意味づけ」を A で表すとすると, (1)–(6) の場合の mark の意味は次のように表すことができる:

(7) X に M が付加されることによって, X が A であるという状況が生じる  
 この場合, X に付加される M は X が A であるという状況を生じさせる原因となるものであるが, M の存在は通常は故意にもたらされたものではなく, 非意図的な行為や予期せぬ出来事の結果としてもたらされたものである。また, M の存在に伴う A という意味づけもあくまでも結果として生じるものである。この場合 M と A は自然な結びつきを持ち, M のあり方によって A のあり方が含意されるために, A が文要素として顕在化していないと考えられる。

## 2.2.2 語義その2——「印の付加」

2.1 で述べたように, mark という語は「痕跡」から「印」へという名詞語義のメタフォリカルな拡張に対応した動詞語義が展開する。それは次のような場合である:

- (8) mark one's clothes with one's initials / mark one's initials on one's clothes (ジー<sup>4</sup>)
- (9) mark goods with prices / mark prices on goods (グロ<sup>2</sup>, cf. *OALD*<sup>6</sup>)
- (10) The asterisks mark the more important references. (グロ<sup>2</sup>)
- (11) The cross marks the spot where the body was found. (*OALD*<sup>6</sup>)
- (12) A statue of George Washington marks the spot where he took the oath as

first President of the United States.

- (13) Large buoys were positioned in the sea to mark the boundaries of the bridge construction work.

これらにおいて、markは「ある対象物にある意味づけを与えるために、その対象物に（故意に）ある印をつける」の意味を表す。これはM（付加物）、X（対象物）、A（意味づけ）を用いて表現すれば「XがAであることを示すためにXに故意にMという印をつける」ということである。換言すれば次のようになる：

- (14) XにMが故意に付加されることによって、XがAであるということが示される

たとえば(8)の場合だと、「自分の服 (one's clothes)」(=X)に「自分のイニシャル (one's initials)」(=M)が故意に付加されることにより、それが「イニシャルによって示された人の所有物という意味づけを持つもの」(=A)であることが示されることになる。(10)の場合だと「ある参考文献(を表示したもの)」(=X)に「星印 (asterisks)」(=M)が故意に付加されることによって、それが「他のものよりも重要な参考文献(を表示したもの)」という意味づけを持つもの」(=A)であることが示されることになる。M, X, Aと文の要素との対応関係を見ると、Mはwithの前置詞句または動詞の目的語で示されているか((8)(9))、文の主語で示されている((10)–(13))。Xは動詞の目的語またはonの前置詞句で示されているか((8)(9))、文中には明示されていない((10)–(13))。Aは文中には明示されていないか((8)(9))、動詞の目的語で示されている((10)–(13))<sup>(4)</sup>。これからわかるように、これらの場合、上の(1)–(6)の場合とは異なりXは明示されないがAは明示されることが少なくない。これはMおよびMとAの結びつきの性質の違いに基づくものであると考えることができる。すなわち、この場合Mは「痕跡」ではなく「印」であり、通常は人為的・恣意的に設定されるものであるので、それに対応してMとAの結びつきも人為的・恣意的な取り決めということになる<sup>(5)</sup>。したがってこの場合Mのあり方によってAのあり方が必然的に決定されるわけではなく、Aを明示しなければMの意義が不明になるために、一般にAの明示が行なわれると考えられる<sup>(6)</sup>。

MとAの結びつきが恣意的な取り決めに基づくものであることから、この場合の動詞markの用例は恣意性を前提としたわれわれの言語のしくみについて記述した文の中にもしばしば見受けられる。それは次のような場合である：

- (15) Japanese explicitly marks the topic of the sentence with a special particle.  
 (16) A period is used to mark the end of a sentence unless that sentence is a

question or an exclamation. (Schwartz 2001: 100)

- (17) Preposition *to* marks the goal of a movement./Preposition *from* marks the source of a movement.
- (18) The verb *confess* thus focuses on the fact that the subject now says that he did do it, with preposition *to* marking the event that the confession is orientated towards. (Dixon 1991: 273)

たとえば (15) の場合だと、日本語においては、(この文中には表現としては明示されていない)「ある名詞句」(=X)に「ある特別な不変化詞(この場合は係助詞のハ)」(=M)が付加されることによって、それが「文の話題」(=A)であることがはっきりと示されることになる。MがAとの結びつきを持つことは恣意的な取り決めによるものである。同様に(16)の場合だと、(この文中には表現としては明示されていない)「文におけるある位置」(=X)に「ピリオド」(=M)が付加されることによって、そこが「文末の位置」(=A)であることが示されることになる。これらからわかるように、この場合の動詞 mark は前置詞・助詞・句読点などの文法的な要素が他のある要素(典型的には名詞句などの語彙的な要素)に付加されることによって、その要素がその文法的要素と結びついたある意味づけを与えられることを示すものであると言える<sup>(7)</sup>。

この (15)–(18) の場合、動詞の目的語は A (意味づけ) に対応しているが、同様の用法において動詞の目的語が「A 自体」ではなく「A についての情報の種類」である場合がある。次の例がそれに相当する：

- (19) ...aspect in English is marked by a combination of inflectional suffixes and auxiliary verbs (i.e. periphrastic constructions). (Berk 1999: 107)

これは「英語ではアスペクトという文法のカテゴリーは屈折接尾辞と助動詞の組み合わせによって迂言的に表される」ということであるが、この場合の「アスペクト (aspect)」とは進行形 (progressive) や完了形 (perfect) によって表されるものを指すので、進行形 (be Ving) においては「be (助動詞) と-ing (屈折接尾辞)」(=M) が「V (語彙動詞)」(=X) に付加されることによって、また完了形 (have Ven) においては「have (助動詞) と-en (屈折接尾辞)」(=M) が「V (語彙動詞)」(=X) に付加されることによって、それぞれ V を意味づける「アスペクト」に関する情報が与えられるということである。このような、動詞の目的語が「A についての情報の種類」である例に関連するものとしては、序説に挙げた次のようなものも含めることができるであろう：

## (20) tense marker/mood marker

これは「それがある要素 (V (語彙動詞)) (=X) に付加されることによって, 時制 (tense) や法 (mood) という文法のカテゴリーに関する情報を標示する機能を持つもの」ということで, 表現全体としては M (付加物) に対応するものである。

## 2.2.3 語義その3——「行事の付加」

2.2.2 では動詞 mark の語義として「印の付加」に関わる場合について考察したが, その「印」にはさまざまな性質と機能を示す形態がありうる。広義の「印」に関わる語義でありながら, しばしば上述のものとは区別される語義の例として, 次のようなものがある:

- (21) a festival to mark the town's 200th anniversary (*LDCE*<sup>3</sup>)
- (22) a ceremony to mark the 50th anniversary of the end of the war (*OALD*<sup>6</sup>)
- (23) India marks the 60th anniversary of independence.
- (24) The book was published to mark his 70th birthday. (瀬戸 (編) 2007)
- (25) mark her birthday by having a party (ジー<sup>4</sup>)
- (26) In the U.S. it is customary to mark Memorial Day by visiting graveyards and war monuments.

これらの例に見られる mark は, 英和辞典では「祝う, 祝賀する, 記念する」などの訳が与えられており, 英英辞典でも“celebrate”の意味であると説明されていることが多い<sup>(8)</sup>。これは M (付加物), X (対象物), A (意味づけ) を用いて表現すれば「X が A であることを一般に広く知らせて, それを際立たせるために, X に M という印をつける」ということである。この場合「印」とは, 「(祝賀・記念などの) 行事」を指す<sup>(9)</sup>。換言すれば次のようになる:

- (27) X に M が行なわれることによって, X が A であるということが一般に広く知らされ, 他とは異なる特別なものとして際立たせられる

たとえば (21) の場合だと, 「今年という年/今日という日」 (=X) に「祝賀行事としてのお祭り」 (=M) が行なわれることによって, 「今年/今日」が「その町の創立 200 周年」 (=A) にあたるのが一般に広く知らされ, それが他とは異なる特別な年/日として際立たせられるということになる。M, X, A と文の要素との対応関係を見ると, M は (23) を除いて「動詞+目的語」の部分に先行または後続する要素の中に示されている。X は表現としては明示されていないが, A は動詞の目的語で示されている<sup>(10)</sup>。これらにおいて M は「(祝賀・記念などの) 行事」であるが, この場合の M

——「コト」を表す——について、2.2.2で扱った例におけるM——通常は「モノ」を表す——と比較してみると、2.2.2の諸例におけるMは「その存在により、XがAであるということを同定させ、AであるXを他のものとは異なるものとして識別させる」ということを主たる機能とするものであるのに対して、この(21)–(26)の例におけるMは「XがAであるという認識を強化させ、Xを他とは異なる特別なものとして際立たせる」ということを中心的な機能とするものであると言える。Mの「モノ」対「コト」という性質の対照は、「同定・識別」対「認識強化・際立たせ」という機能の対照と関連づけられるものである。

上述のように、M、X、Aと文要素との対応関係に関して、上の(21)–(26)においてはXは表現上明示されずAが動詞の目的語の位置を占めるといった形をとっているが、ときにはXが明示され、文の主語と動詞の目的語にそれぞれXとAが対応していると考えられる場合がある。次の例がそれに相当する：

- (28) This year marks the university's 30th anniversary. (ジ<sup>4</sup>)  
 (29) Today marks my tenth anniversary with this company. (CDAE)  
 (30) The week of 17-23 April marks National Volunteer Week in Canada, a special week set aside to recognize the 6.5 million Canadians who donate their time and energy each year to support causes in communities across the country.

これらの場合注目すべきことは、Mが表現されず背景に退いており、XとA（すなわち、「対象物」と「その意味づけ」）という関係のみに焦点が当てられているという点である。(28)の場合は、実際には何らかの（動的な）「祝賀行事」（Mに相当）が挙行される可能性が高いと考えられるが、そのような可能性についてここで問題にされているわけではなく、「今年という年」（=X）が「その大学創立30周年」（=A）という特別な記念すべき年であるという（静的な）事実そのものが焦点化されていると考えられる。また(29)の場合は、現実的にそのような「行事」（Mに相当）が行なわれる可能性は考えにくく、単に「今日という日」（=X）が「その会社に入社して10年目に当たる日」（=A）という自分にとって特別な意味を持った際立ちの高い日として記憶に留められるだけであってもさしつかえない。このように、「XとAの関係の焦点化」によってその意味関係からMが除外される場合は、動詞markは二項間のみの静的な関係の表現ということになり、次のように動詞beを用いたパラフレイズの可能性が生じる：

- (31) Today is my tenth anniversary with this company.

このような意味関係の変化の過程は、動詞 mark がその本来の三項間の意味を希薄化／漂白化 (bleaching) させて、もっぱら二項間の静的な関係を表す一種のコピュラ (copula) に近づいていく文法化 (grammaticalization) のプロセスとして捉えることができるであろう。動詞 mark のコピュラ化のプロセスは、以下でとり上げる別の語義に関しても認められる。

#### 2.2.4 語義その4——「新事物の付加」

2.2.3 では動詞 mark の語義として、「印の付加」の「印」が「(祝賀・記念などの)行事」である場合について考察したが、広義の「印の付加」に包摂されうるもう一つの語義として、次のような場合について考えてみることにする：

- (32) The death of the emperor marked the end of an epoch in the country's history. (OALD<sup>6</sup>)
- (33) U.S. officials said the missile strikes mark the beginning of a long fight against terrorism around the world.
- (34) The publication of Saussure's *Cours* is often taken to mark the beginning of modern linguistics.
- (35) These works mark the beginning of a new maturity in Mozart's style. (瀬戸 (編) 2007)
- (36) The agreement marks a new phase in international relations. (OALD<sup>6</sup>)
- (37) This speech may mark a change in government policy. (OALD<sup>6</sup>)
- (38) His third film marks a major advance in cinematic techniques. (LDCE<sup>3</sup>)
- (39) The festivities marked a respite from the daily grind for US troops in Iraq.

これらの例に見られる mark は、英和辞典では「(新しいこと)が始まる印となる、(進歩など)を画する」などの訳が与えられており、英英辞典では“be a sign that something new is going to happen, be a sign of an important change or an important stage...”などと説明されている<sup>(11)</sup>。これまでの議論との接点を模索すると、この場合の mark の語義は、「ある(抽象的に設定される)『場』にある新しい事物が登場したことによって、その『場』に新たな意味合いが与えられる」と解することができると思われる。これは M (付加物)、X (対象物)、A (意味づけ) を用いて表現すれば「ある『場』(=X)にある新事物(=M)が登場して、それによって X は新たな意味合い(=A)を帯びるものとして認識される」ということである<sup>(12)</sup>。この



場合「印」とは、『場』を新たに意味づける働きをする新事物」を指す<sup>(13)</sup>。換言すれば次のようになる：

- (40) XにMが新たに付加されることによって、XがAであるという新たな認識が生じる

たとえば(32)の場合だと、「ある時」(=X)に「その皇帝の死」(=M)という出来事が起こり、それによってその時が「その国の歴史における一時代の終焉」(=A)という特別な意味を持つものとして認識されるということになる。M, X, Aと文の要素との対応関係を見ると、Mは文の主語で示されており、Xは表現としては明示されておらず、Aは動詞の目的語で示されている。これらの場合のM——通常は「コト」を表す——は「その存在により、XがAであるという認識を新たに作り出し、Xが特別な意味を持つものとして際立たせる」ということを主たる機能とするものであり、これは2.2.3の(21)―(26)の例における(「コト」を表す)Mの機能に類似していると言える。ただし(21)―(26)の場合XがAであるということは既定の事実であり、Mはその認識の強化を図ることを意図されたものであるのに対して、この(32)―(39)の場合XがAであるという認識はMによって初めてもたらされるものであり、ゆえにその機能は「新たな認識の創造(および際立たせ)」と特徴づけるのが妥当である。また、この「認識の創造」の場合、「認識の強化」の場合とは異なりMがそのような機能を果たすことが必ずしも当初から意図されているというわけではない。むしろそのような機能の遂行は結果的なものであると言える。

M, X, Aと文要素との対応関係に関して、上の諸例においてはXは表現上明示されずAが動詞の目的語の位置を占めるという形をとっているが、2.2.3で見た場合と同様に、ときにはXが明示され、文の主語と動詞の目的語にそれぞれXとAが対応していると考えられる場合がある。次の例がそれに相当する：

- (41) April marks the start of the school year in Japan.

- (42) October marks a brief respite from the blazing heat of summer and the cold winds of winter.

これらの場合注目すべきことは、2.2.3で考察した場合と同様Mが表現されず背景に退いており、XとA(すなわち、「対象物」と「その意味づけ」という関係のみに焦点が当てられているという点である。(41)の場合、4月において「入学・卒業・進級などに伴う学生・生徒の入れ替わり」(Mに相当)という出来事が生じ、それによって「4月という月」(=X)が「日本における学年の始まるの月」(=A)という特別な月であるという関係が成立するのであるが、ここではMに相当する出来事それ自

体は背景に退いていて、XがAであるという関係そのものに焦点が当てられていると考えられる。(42)の場合も同様に、10月には「10月特有の気候上の特徴」(Mに相当)が生じ、それによって「10月という月」(=X)が「夏と冬の厳しい気候の間に挟まれた短い(貴重な)中休みの時期」(=A)という特別な意味を持った時期であるという関係が成立するのであるが、ここでもやはり、Mに相当する「気候上の諸特徴」それ自体は背景化しており、XがAであるという関係そのものが焦点化されていると考えられる。ここで「XがAであるという『関係』」という言い方をしたが、これはこの場合、XにおけるMに相当する事柄の生起が習慣化していて、それによってXがAであるという認識が定着しているために、XがAであることは一種の(静的な)「関係」になっていると見なすのが妥当であると考えられるからである。このように、「XとAの関係の焦点化」によってその意味関係からMが除外される場合は、以前に扱った場合と同様に動詞 mark は二項間だけの静的な関係の表現ということになり、文法化の一面としての意味の希薄化によるコピュラ化が生じていると考えられる。この場合、コピュラ動詞または他のコピュラ化した動詞によってパラフレイズできる可能性が生じる：

(43) April is the start of the school year in Japan.

(44) October represents a brief respite from the blazing heat of summer and the cold winds of winter.

ここで扱った「新事物の付加」に属する場合と前に扱った「行事の付加」に属する場合は、上述のように関与するMの性質と機能に類似性が見られるが、それとともに動詞のコピュラ化の可能性という点においても平行性が見られることは興味深い<sup>(14)</sup>。

## 2.2.5 語義その5——「特徴づけ」

これまで動詞 mark に関して、「痕跡の付加」、「印の付加」、そして広義の「印の付加」に含まれる「行事の付加」および「新事物の付加」に関わる語義について三つの意味要素を仮定してそれに基づいた具体的な分析を進めてきた。以下ではこの分析の枠組に依拠しつつ、上では扱われなかったもう一つの語義について検討することにする。これは以下に例示されるような場合である：

(45) the qualities that mark a good teacher (グロ<sup>2</sup>)

(46) He is marked by diligence. (ジ-<sup>4</sup>)

(47) a life marked by suffering (OALD<sup>6</sup>)

(48) Her writing is marked by a subtle irony. (LDCE<sup>3</sup>)

- (49) The book helps you understand the many colorful onomatopoeic expressions that mark the Japanese language.
- (50) India has a tropical climate marked by high temperatures and dry winters.
- (51) The land of Japan is marked by short, rushing rivers, forested slopes, irregular lakes, and small, rich plains.
- (52) Narcolepsy is a disease marked by uncontrollable sleepiness.

これらの例に見られる mark は、英和辞典では「特徴づける、目立たせる」などの訳が与えられており、英英辞典では“characterize, be typical of”などと説明されている<sup>(15)</sup>。これまでの議論とのつながりを意識して言えば、この場合の mark の語義は、「ある対象物に含まれているある顕著な特徴によって、それが他とは異なるものとして目立つ存在になっている」ということになる。これは M, X, A の三項を用いて表現すれば、「ある対象物 (=X) に含まれる顕著な特徴 (=M) によって、X は他とは異なる類のものという意味合い (=A) を帯びるものとして目立つ存在になっている」ということである。この場合留意すべきことは、M は X に対して外部から付加される「印」ではなく、対象物に本来内在し、対象物を構成する「特徴」であるという点である<sup>(16)</sup>。その意味において、この場合 M は（「付加物」に対して）「構成物」と呼んでもよいと思われる。換言すれば次のようになる：

- (53) X の構成物として M が含まれることによって、X が A として目立つ存在になっている

たとえば (45) の場合だと、「すぐれた教師と言える教師」(=X) がその構成物としてそれを備えていることによって「他とは異なる類の教師」(=A) として目立つような「いくつかの特徴/資質」(=M) ということである。(46) の場合だと、「彼という人間」(=X) が「勤勉さ」(=M) という特質を備えていることによって「他の人とは異なる存在」(=A) として目立つということになる。M, X, A と文の要素との対応関係を見ると、基本的には動詞 mark を主動詞とする能動の節の主語・目的語で示されているものがそれぞれ M・X に対応する。節が受動の場合は、その節の主語・by の前置詞句で示されているものがそれぞれ X・M に対応する。A は表現としては明示されていない。これらの場合の M は X に内在するものであって、それが「コト」か「モノ」かは特に問われないが、この場合 M の機能という点でも幅があると思われる。すなわち、M は場合によって「同定・識別・際立たせ」のいずれの機能をも果たす可能性を有すると考えられる。上の例で言うと、(45) (52) などは「同定・識別」に傾い

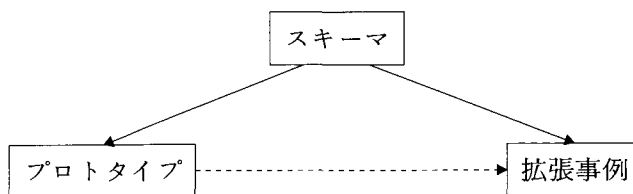
ていると感じられるが、(46) (47)などは「際立たせ」が優勢であると思われる。Mの機能の特化の傾向性の有無が、その「付加物」「構成物」の区別と相関を持つと考えられる。

### 3. 動詞 mark の多義構造とカテゴリーのネットワーク

2. では動詞 mark の個々の語義について、M, X, A という三つの意味要素を仮定して詳細に分析を行なった。上の分析はこの動詞の意味的拡がりの全般にわたるものではないが、その輪郭はある程度把握することができたのではないと思われる<sup>(17)</sup>。以下では、これまでの分析に基づいて、動詞 mark の多義構造を Langacker の認知文法で提唱されている記述の枠組を用いて一般的な観点から捉えることを試みる。ここでとりあげるのは複合カテゴリーのネットワークのあり方を記述するモデルである。

#### 3.1 Langacker のネットワーク・モデル

Langacker の認知文法においては、言語カテゴリーに典型的な複数のメンバーから成る複合カテゴリー (complex category) を記述するモデルとして、「スキーマ関係 (schematicity)」に基づく「スキーマ化 (schematization)」および「拡張関係 (extension)」から成る「カテゴリー化関係 (categorizing relationships)」による節点 (node) のリンクに基づく「ネットワーク・モデル (network model)」が提案されている<sup>(18)</sup>。「スキーマ関係」とは意味の階層関係であり、下位に位置する意味が上位に位置する意味を詳細化/具体化 (elaborate/instantiate) するという関係を指す。プロトタイプと部分的な類似性を有する事例にカテゴリーが拡がっていくことが「拡張」であり、カテゴリーの「拡張」によって生じた事例とプロトタイプとの共通性 (スキーマ) が抽出され、それによって意味の階層関係 (「スキーマ関係」) が生じることが「スキーマ化」である。プロトタイプとその拡張事例はスキーマを詳細化/具体化したものであるということになる (下の図を参照)<sup>(19)</sup>。



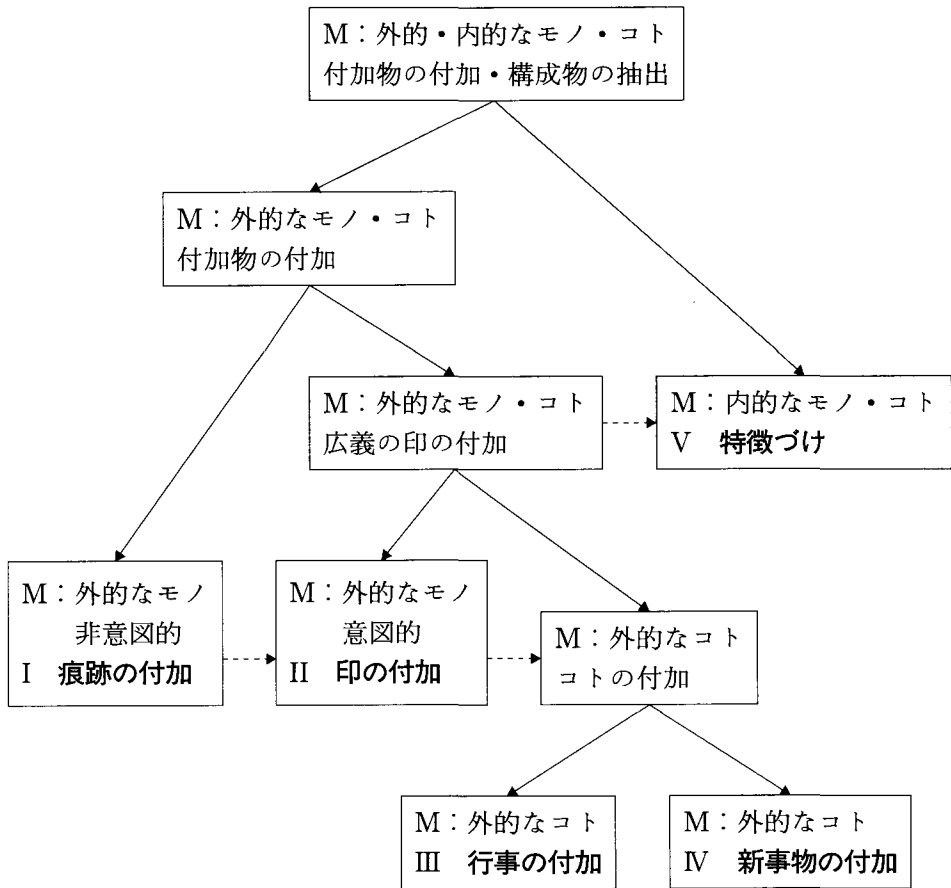
ネットワークの基本はこの「スキーマ」「プロトタイプ」「拡張事例」の組み合わせから成るが、現実のカテゴリーの多くは基本的な関係がさまざまな形で複合したものから構成され、それがさらなる発展により一層複雑な様相を呈する 경우가少なくない<sup>(20)</sup>。

### 3.2 動詞 mark の多義構造のネットワーク・モデル

次に、上で概観した Langacker のネットワーク・モデルの枠組に動詞 mark の多義構造を位置づけることを試みる。まず 2. で行なった議論をその焦点となる M の性質の観点から整理しておくことにする。2. では動詞 mark について五つの語義の検討・分析を行なったが、語の中心義である名詞語義の「痕跡」に対応する「痕跡の付加」を表す語義がその多義構造の出発点になっている。「痕跡の付加」の場合、M は「モノ」であり、それは外部からもたらされた一般に非意図的なものであるとすることができるが、この M の非意図性の条件を解除したものが「印の付加」を表す語義である。「印の付加」の場合、M は外的なものであるという点は「痕跡の付加」の場合と共通しているが、「痕跡」と異なり「印」は人為的・恣意的な取り決めによるものであり、人間の意図の介在は明白である。「印の付加」の場合、M は「痕跡の付加」の場合と同様通常は「モノ」を表すが、これが「モノ」ではなく「コト」になったものが「行事の付加」および「新事物の付加」である。これらの場合も、通常の「印の付加」の場合と同様 M は外的なものであるが、M が付加物ではなく対象物に本来内在する構成物である場合が「特徴づけ」である。この場合、M には特に「モノ」か「コト」かの限定は存在しない。以上を各語義ごとにまとめると次のようになる：

- |               |                 |
|---------------|-----------------|
| I : 「痕跡の付加」   | M : 外的なモノ, 非意図的 |
| II : 「印の付加」   | M : 外的なモノ, 意図的  |
| III : 「行事の付加」 | M : 外的なコト       |
| IV : 「新事物の付加」 | M : 外的なコト       |
| V : 「特徴づけ」    | M : 内的なモノ・コト    |

これに基づいて動詞 mark の多義構造のネットワーク・モデルを構築すると次に示すようになる。各々のボックスがネットワークの節点を表し、各節点はスキーマ関係および拡張関係によってリンクされている。ネットワークの最上位に位置する節点が「スーパースキーマ (superschema)」であり、動詞 mark の最も抽象的なレベルの語義として想定しうるものである。語の多義性がネットワークの多層構造によって表現されている<sup>(21)</sup>：



#### 4. 結語

本論考では、英語の動詞 mark の語義の分析に基づいて、その多義的な意味構造を Langacker の認知文法で提唱されているカテゴリーのネットワーク・モデルの枠組の中に位置づけることを試みた。語義の分析において仮定した三つの意味要素は本動詞がかかざらう「標示の諸相」の分析およびそのネットワーク化にとって有意義であることが示されたと思われる。さらに、語の多義構造の分析におけるネットワーク・モデルの有効性に対しても一つの例証が与えられたのではないかとと思われる。小論が、個別性への着目を強えられる語彙の問題に一般的・体系的視点を導入する意義に注目を向け、膨大な語彙の世界の認知的な解明という遠大な研究課題への取り組みの一步

となることを望むものである。

## 注

1. 英語の語法研究の立場と目的およびその対象については、たとえば八木 (1996: 29-35) を参照。
2. 認知意味論の立場から英語の動詞の意味の構造を分析した先駆的研究として田中 (1987) および田中 (1990) がある。また、認知言語学の諸概念に基づいて英語の多義語の語義のネットワークの包括的記述を試みたものとして瀬戸 (2007) がある。
3. 以下において、(グロ<sup>2</sup>) (ジー<sup>4</sup>) (LDCE<sup>3</sup>) (OALD<sup>6</sup>) (CDAE) はそれぞれ『新グローバル英和辞典 第2版』、『ジーニアス英和辞典 第4版』、*Longman Dictionary of Contemporary English*, 3rd ed., *Oxford Advanced Learner's Dictionary of Current English*, 6th ed. および *Cambridge Dictionary of American English* を表す。なお、ウェブなどから採った例については出典の表示を省略する。
4. (8) (9) において、M と X の具現のあり方における交替が見られるが、これは一般に「壁塗り交替 (spray paint alternation)」または「場所格交替 (locative alternation)」と呼ばれる構文交替の一種である (影山 (編) 2001: 第4章)。
5. このような場合、M は一種の「人為記号」であり、(1)–(6) の場合は M は一種の「自然記号」であることになる (鈴木 1996: 第1章)。
6. ただし (8) (9) の場合は、「イニシャル」「価格」という M の性質上、M のあり方により A のあり方が (ある程度) 必然的に決定されるものであると考えられる。この場合は A が明示されていない。
7. この場合、文法的要素が、それが付加される語彙的要素を意味づけると言っても、一般に文法理論において「文法的要素は語彙的要素に付加される存在である」ということを必ずしも主張しているわけではない。動詞 mark の用法として見た場合そのような捉え方をすることができるということである。
8. (グロ<sup>2</sup>) (ジー<sup>4</sup>) (LDCE<sup>3</sup>) (OALD<sup>6</sup>) および瀬戸 (編) (2007) 参照。
9. すなわち、通常は「印」と言えば何らかの「モノ」であることが多いが、この場合は「モノ」ではなく (「行事」という) 「コト」であるということである。
10. 次の場合、主節の主語で示されている事柄 (「彼らの骨の折れる労働」) は X であり、X に M (「拍手をおくるという行為」) が付加されることによって X にある意味づけ A (「価値の高い行ないであること」) が与えられることが示されている：  
As Ground Zero workers left the site, their hard work was marked with applause.  
この場合 M は「(祝賀・記念の) 行事」ではなく、「(拍手という) 賞賛の意の具体的表現」であるが、ここでは「行事」に準じるものとして扱う。
11. (グロ<sup>2</sup>) (ジー<sup>4</sup>) (LDCE<sup>3</sup>) (OALD<sup>6</sup>) 参照。
12. この場合の「場」とは、「ある時代の中の局面」や「ある物事の進展・進行における段階」などを指す。
13. この場合、「印」は通常は「コト」であるが、表現上は (38) などのように「コト」の焦

点となる「モノ」である場合もある。

14. このことは多義語を構成する語義の連続性を示唆するものであると言える。
15. (グロ<sup>2</sup>) (ジー<sup>4</sup>) (LDCE<sup>3</sup>) (OALD<sup>6</sup>) 参照。
16. この場合、その「特徴」は「対象物」を構成するものであるが、「対象物」のステイタスについては制約がないので、その構成物である「特徴」についてもそのステイタスに制約はない(すなわち、「モノ」か「コト」かという限定はない)。
17. 動詞 mark には 2. で検討した用法のほかにもいくつか用法がある。多少頻度が低いと思われる用法の一つとして次のようなものがある：  
John's silence marked his agreement. (瀬戸 (編) 2007)  
The girl's flushed cheeks marked her joy. (グロ<sup>2</sup>)  
これらは 2. で扱った用法に比較的近いものと思われるが、ここでは扱う対象から除外する。
18. Langacker (1987: Chap. 10, Chap. 11; 1988a; 1988b; 1990: Chap. 10; 1991: 550) を参照。また 靱山 (2001) および 辻 (編) (2002: 195) も参照。
19. 図において、実線はスキーマの詳細化/具体化を表し、破線はプロトタイプの拡張を表す。
20. カテゴリーのネットワークの動的な発展のあり方については Langacker (1987: 381-386) を参照。
21. ネットワークの最下位の節点である「Ⅲ：行事の付加」および「Ⅳ：新事物の付加」において、本論で述べたように M の背景化による動詞のコピュラ化が生じる場合がある。これはそれぞれの場合の拡張事例ということになるが、この場合拡張事例と拡張元からスキーマを抽出しようとする議論が込み入ってくるためにここでは省略する。なお局所的なスキーマ化を図ることなく拡張事例のみを加えるという形にすることもできるが、その場合は部分的に放射状モデル (radial model) を採用することになる。これについて詳細は Lakoff (1987) を参照。

### 参考文献・例文出典

- 影山太郎 (編) (2001) 『日英対照 動詞の意味と構文』東京：大修館書店。
- 木原研三 (監)・山岸和夫 (編) (2001) 『新グローバル英和辞典 第2版』東京：三省堂。
- 小西友七・南出康世 (編) (2007) 『ジーニアス英和辞典 第4版』東京：大修館書店。
- 鈴木孝夫 (1996) 『教養としての言語学』東京：岩波書店。
- 瀬戸賢一ほか (編) (2007) 『英語多義ネットワーク辞典』東京：小学館。
- 田中茂範 (1987) 『基本動詞の意味論：コアとプロトタイプ』東京：三友社出版。
- 田中茂範 (1990) 『認知意味論：英語動詞の多義の構造』東京：三友社出版。
- 辻幸夫 (編) (2002) 『認知言語学キーワード事典』東京：研究社。
- 靱山洋介 (2001) 「多義語の複数の意味を統括するモデルと比喻」, 山梨正明 (編) 『認知言語学論考 No. 1』: 29-58 東京：ひつじ書房。



- 八木克正 (1996) 『ネイティブの直観にせまる語法研究——現代英語への記述的アプローチ——』 東京：研究社出版。
- Berk, Lynn M. (1999) *English Syntax: From Word to Discourse*. New York/Oxford: Oxford University Press.
- Dixon, R. M. W. (1991) *A New Approach to English Grammar, on Semantic Principles*. New York: Oxford University Press.
- Lakoff, G. (1987) *Women, Fire, and Dangerous Things: What Categories Reveal about the Mind*. Chicago: University of Chicago Press.
- Landau, Sidney I. (2000) *Cambridge Dictionary of American English*. (CDAE) Cambridge: Cambridge University Press.
- Langacker, R. W. (1987) *Foundations of Cognitive Grammar*, Vol. I. Stanford: Stanford University Press.
- Langacker, R. W. (1988a) "A View of Linguistic Semantics." In Brygida Rudzka-Ostyn (ed.), *Topics in Cognitive Linguistics*: 49-90. Amsterdam: John Benjamins.
- Langacker, R. W. (1988b) "A Usage-Based Model." In Brygida Rudzka-Ostyn (ed.), *Topics in Cognitive Linguistics*: 127-161. Amsterdam: John Benjamins.
- Langacker, R. W. (1990) *Concept, Image, and Symbol: The Cognitive Basis of Grammar*. Berlin/New York: Mouton de Gruyter.
- Langacker, R. W. (1991) *Foundations of Cognitive Grammar*, Vol. II. Stanford: Stanford University Press.
- Schwartz, J. (2001) *Grammar Power*, 2nd ed. New York: Simon & Schuster.
- Summers, D. (ed.) (1995) *Longman Dictionary of Contemporary English*, 3rd ed. (LDCE<sup>3</sup>) Essex: Longman.
- Wehmeier, S. (ed.) (2000) *Oxford Advanced Learner's Dictionary of Current English*, 6th ed. (OALD<sup>6</sup>) Oxford: Oxford University Press.